

大学生における他者意識と情動知能の関係

著者	豊田 弘司, 森田 泰介, 岡村 季光, 稲森 涼子
雑誌名	教育実践総合センター研究紀要
巻	17
ページ	29-34
発行年	2008-03-31
その他のタイトル	Relationship between Consciousness of Others and Emotional Intelligence in Undergraduates.
URL	http://hdl.handle.net/10105/668

大学生における他者意識と情動知能の関係

豊田弘司

(奈良教育大学心理学教室)

森田泰介

(岡山学院大学)

岡村季光

(奈良保育学院)

稲森涼子

(奈良教育大学心理学教室)

Relationship between Consciousness of Others and Emotional Intelligence in Undergraduates.

Hiroshi TOYOTA

(Department of Psychology, Nara University of Education)

Taisuke MORITA

(Okayama Gakuin University)

Toshimitsu OKAMURA

(Nara Nursery College)

Ryoko INAMORI

(Department of Psychology, Nara University of Education)

要旨：本研究では、大学生における他者意識（内的他者意識，外的他者意識，空想的他者意識）と情動知能における下位能力である他者の情動の認識と理解の関係を検討した。875名の大学生を調査対象として、短縮版J-ESCQ（Japanese Version of Emotional Skills & Competence Questionnaire）から選択された情動の認識と理解に対応する8項目及び辻（1993）による他者意識尺度を実施した。他者意識尺度の3つの下位尺度得点と短縮版J-ESCQの情動の認識と理解に対応する8項目の合計点の間の相関係数を検討した結果、内的他者意識が情動の認識と理解と最も関係が強く、次いで空想的他者意識であり、外的他者意識とはほとんど関連性はなかった。また、他者意識と恋愛感情の関係を情動知能の水準ごとに検討した。女子においては外的他者意識がどの情動知能の水準においても狂氣的感情との関連性があり、空想的他者意識は情動知能の水準が低い者ほど狂氣的感情及び熱愛的感情と関連のあることが示された。

キーワード：他者意識 other-consciousness 情動知能 emotional intelligence 恋愛 romantic love

1. はじめに

情動知能（Emotional intelligence; EI）に関する数多くの議論が展開され（Fineman, 1993; Mayer & Salovey, 1997; Schutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper, Golden, & Dornheim, 1998）その議論の数に対応して多くの情動知能に関する定義が提出されている（豊田・桜井, 2007）。ただし、それらの定義の中で最も有名なものが、Salovey & Mayer（1990）による

定義である。彼らは、情動知能を情動を扱う個人の能力と定義し、その下位能力を以下のように考えている。すなわち、自分や他人の感情（feeling）や情動（emotion）を監視（モニター）する能力、これらの感じ方や情緒の区別をする能力及び個人の思考や行為を導くために感じ方や情緒に関する情報を利用できる能力である（Law, Wong & Song, 2004）。この定義以降、類似した定義が数多く提出され、その定義に対応する情動知能尺度が開発されている（Davies, Stankov &

Roberts, 1998; Mayer, Caruso & Salovey, 2000; Wong & Law, 2002)。中でも、Takšić (2002) によって開発された、情動スキルとコンピテンス尺度 (Emotional Skills & Competence Questionnaire; ESCQ) は、世界各国でその翻訳版が開発され、その比較もなされている (Faria, Lima Santos, Takšić, Raty, Molander, Holmstrom, Jansson, Avsec, Extremera, Fernandez-Berrocal & Toyota, 2006)。Mayer & Salovey (1997) の定義に基づき、ESCQ の下位尺度は、情動の認識と理解、情動の命名と表現、及び情動の制御と調節の 3 因子に対応している。係数による信頼性は 71 ~ .90 の範囲にあり、これら 3 つの尺度間の関連性は中程度であり ($r = .35 \sim .50$)、下位尺度と尺度全体との関連性の高いこと ($r = .88 \sim .92$) が示されている。これらの結果は、ESCQ の信頼性を示し、適応の指標である他の尺度との相関から、その妥当性も示されている。豊田・森田・金敷・清水 (2005) は、ESCQ の日本版 (J-ESCQ) の作成を試み、因子分析によって 28 項目からなる J-ESCQ を完成させた。この J-ESCQ は、自尊感情及び Big Five における性格特性 (情緒不安定性、外向性、経験への開放性、調和性及び誠実性) との関係から妥当性も明らかにされている。また、Toyota, Morita & Takšić (2007) は、24 項目からなる J-ESCQ の短縮版を作成し、その信頼性と妥当性を確認している。さらに、豊田・桜井 (2007) は J-ESCQ の中学生用の開発を行い、中学生用 J-ESCQ を完成させている。このように ESCQ、J-ESCQ 等の尺度は情動知能測定の尺度として信頼できるものである。

上述したように、情動知能の測定に関しては近年数多くの尺度が開発され、その信頼性も確かめられてきた。しかし、この情動知能を規定する要因の解明に関しては十分ではない。このような規定要因を解明するためには、情動知能に含まれている下位能力を限定して、その規定要因を明らかにするしかない。Mayer & Salovey (1997) の定義に基づく 3 つの下位能力のうち、「情動の認識と理解」能力は、他者の心情や情動の変化を理解する能力である。この能力は、対人関係の適応において特に重要である。他者の心情や情動の理解に関しては、従来の研究では社会的スキル (Social Skill) の研究において取り上げられてきた (Nelson-Jones, 1990)。そこでは、他者の情動が身体的表出を伴う場合に、その身体的表出を手がかりとして他者の情動判断をした場合の正確さは、性度 (男性らしさ - 女性らしさ) と関係しているというものである (斎藤, 1994)。一般に女性は親和欲求が強く、対人的関心が高い。もし、そうであるならば、対人的な関心が他者の情動判断を促進するということになる。

対人的関心の個人差を測定する尺度としては、辻 (1993) の他者意識尺度がある。ここでいう他者意識とは他者へ注意や関心、意識が向けられた状態である。

そして、他者への注意の向けやすさは他者意識特性と呼ばれている。この他者意識特性を測定するのが、この他者意識尺度である。辻の一連の研究 (辻, 1989, 1993) によれば、他者意識を以下の 3 つに分けて記述している。まず、「内的他者意識」とは、他者の心情等の内面情報を理解しようとする意識や関心である。次に「外的他者意識」は他者の服装、体型等の外面情報への意識や関心である。そして、「空想的他者意識」は、他者の空想的なイメージに対する意識や関心である。

上述したように、対人的関心が他者の情動判断を促進するというのであれば、これらの 3 つの他者意識が情動判断を規定する情動知能尺度の得点と関連するはずである。特に、他者の心情等の内的情報を探ろうとする意識である内的他者意識が高ければ、情動知能における他者の「情動の認識と理解」(以下、他者の情動理解) 能力も高くなると予想できる。すなわち、他者の心情を理解することに対する関心や意識が、他者の行動の仕方や感情表現を観察する行動につながり、その結果、情動知能の中の他者の情動を認識し、理解する能力を向上させることになる。したがって、他者意識尺度の下位尺度である内的他者意識得点と J-ESCQ の下位尺度である他者の情動の理解得点との間にはかなりの強い正の相関が認められるであろう。一方、外的他者意識は外的情報への意識や関心であるので、他者の情動理解能力の向上には貢献しないであろう。それ故、両者の相関は有意ではないであろう。さらに、空想的他者意識は、他者の内的、外的情報に関係なくその空想的イメージに対する関心であるので、他者の情動理解能力の向上への貢献は内的他者意識と外的他者意識の間に位置するであろう。したがって、相関係数の値は、外的他者意識よりは高いが、内的他者意識よりは低くなるであろう。これらの予想を検討するのが、本研究の第 1 の目的である。

ところで、対人関係の代表的な場面として恋愛場면을挙げることができる。豊田・岸田 (2006) は、松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田 (1990) が開発した尺度の項目数を減らして、恋愛に関わる 6 つの感情 (狂気, 熱愛, 愛他, 実利, 友愛, 遊戯) を測定するための簡易版恋愛感情尺度を作成した。この尺度で測定できる感情のうち、相手を独占したいという願望に関わる感情 (狂气的感情)、相手と自分がお互いに愛し合っているという感情 (熱愛的感情)、相手とつきあうことによって、自分が損が得かに関わる感情 (実利的感情) が他者意識と関係があるのではないかと考えられる。ただし、そこに情動知能の水準が影響すると予想した。例えば、情動知能が高い者は、空想的他者意識が高くても狂气的感情に振りまわされることはないが、情動知能の低い者は、空想的他者意識の高さから他者に対する妄想が喚起され、それによって

相手の好意をイメージすることで狂气的感情が高まるかもしれない。したがって、本研究の第2の目的は、他者意識、他者の情動理解と狂気、熱愛及び実利的感情の関係を検討することである。

2. 方法

2.1. 調査対象

関西圏にある私立大学1校、私立専門学校1校、及び国立大学1校に在籍する学生875名(男423名、女452名)であり、平均年齢は18.98歳(SD=1.05)であった。

2.2. 調査材料

2.2.1. 他者意識尺度

辻(1993)による他者意識尺度を一部表現を変えて用いた。この尺度は、内的他者意識に対応する項目7項目(例「人の言動には絶えず注意を払っている」)、外的他者意識に対応する項目4項目(例「人の外見に気をとられやすい」)及び空想的他者意識に対応する項目4項目(例「人のことにしばしば思いをめぐらす」)から構成されている。項目自体についてはそのままの表現を用いた。表現を変えたのは、回答の5段階の表現であった。辻(1993)の原版では各項目に対する5段階の表現は、1 全くちがう 2 ちがう 3 どちらともいえない 4 そうだ 5 全くそうであった。本研究では、後述する短縮版J-ESCQの表現とできるだけあわせるために、1 全くあてはまらない 2 ややあてはまらない 3 どちらでもない 4 ややあてはまる 5 とてもあてはまる に変更した。

2.2.2. 短縮版J-ESCQにおける「情動の認識と理解」尺度

Toyota, Morita & Takšić (2007) によって開発された短縮版J-ESCQの24項目から他者の「情動の認識と理解」に対応する8項目(例「私は、友達の気分の変化を見抜くことができる」)を用いた。ただし、1項目の表現に誤りがあったので、この1項目は後の分析から除外した。各項目に対する評定尺度は他者意識尺度と同じく5段階(1 決してそうでない 2 めったにそうでない、3 時々そうである、4 だいたいそうである、5 いつもそうである)であった。

2.2.3. 教育用簡易版恋愛類型尺度

豊田・岸田(2006)によって作成された尺度であり、6つの恋愛感情(狂気、熱愛、愛他、実利、友愛、遊戯)を調べるそれぞれ3項目、全18項目からなっている。本研究ではこのうちの狂气的感情(項目例「彼(女)が私以外の異性と楽しそうに話していると、気になって仕方ない。」、熱愛的感情(項目例「彼(女)とはお互いに愛し合っていると実感している(したいと思う)」、実利的感情(項目例「恋人を選ぶとき、その人の将来性を考えてみる。」)の全9項目のみを用いた。評定は「よくあてはまる(5)」から「まった

Table 1 他者意識と他者の情動理解間の相関(r)

他者意識のタイプ	男	女
内的他者意識	.56	.53
外的他者意識	.18	.07
空想的他者意識	.25	.27

Table 2 内的他者意識による群ごとの他者の情動の理解得点

内的他者意識得点による群		内的他者意識		他者の情動の理解	
		男	女	男	女
高	M	30.94	30.28	24.93	24.95
	SD	2.25	2.09	4.91	4.50
中	M	25.19	25.50	21.42	22.04
	SD	1.43	1.08	4.29	4.19
低	M	18.66	20.30	17.96	19.19
	SD	3.29	2.62	4.83	4.52

くあてはまらない(1)」の5段階評定を用いた。

2.3. 調査手続

調査は第1著者、第2著者及び第3著者によって、講義時間内に集団的に実施された。まず、調査対象である大学生に上記の3つの尺度が印刷されたB4判の用紙が配布され、回答の仕方に関する説明を受けた。尺度の各項目は調査者によって読み上げられ、調査対象の学生はそれぞれの尺度において5段階評定で回答していった。

3. 結果

3.1. 他者意識と他者の情動理解の関係

他者意識と情動知能における他者の情動理解能力の間の関係を調べるために、他者意識尺度の3つの下位尺度のそれぞれの得点と、他者の情動理解得点との相関係数(r)を算出した。Table 1には、その結果が示されている。男女ともに、内的他者意識と他者の情動理解得点間に高い正の相関があり、空想的他者意識と他者の情動理解得点間には低い正の相関があった。

内的他者意識と他者の情動理解の間に高い正の相関が見られたので、両者の関係を見やすくするために、内的他者意識の得点によって3つの群に分けた。そしてそれぞれの群における他者の情動理解得点の平均を算出した。その結果がTable 2に示されている。2(性)×3(内的他者意識;高,中,低)の分散分析を行った結果、性の主効果($F_{(1,870)} = 4.03, p < .05$)が有意であり、男子よりも女子の方が他者の情動理解得点が高かった。また、群の主効果($F_{(2,870)} = 142.07, p < .001$)が有意であったので、多重比較(HSD)を行ったところ、3群間に有意差が認められた。すなわち、他者の情動理解得点において、内的他者意識の高>中>低群という関係が示された。なお、交互作用は有意でなかった。

Table 3 他者の情動理解の水準による群ごとの恋愛感情と他者意識の相関係数 (r)

感情型	性	他者の情動理解の水準						全体	
		高		中		低		男	女
		男	女	男	女	男	女		
N		130	140	153	159	140	154	423	452
狂気	内	.24	.28	.27	.16	.25	.21	.27	.23
	外	.21	.30	.34	.34	.22	.31	.26	.31
	空想	.21	.24	.25	.17	.37	.38	.30	.28
熱愛	内	.16	.25	.40	.04	.35	.11	.33	.22
	外	.17	.23	.20	.11	.19	.16	.20	.17
	空想	.21	.12	.37	.18	.37	.24	.34	.22
実利	内	.27	.12	.27	.18	.18	.03	.28	.18
	外	.12	.03	.03	.19	.05	.07	.08	.10
	空想	.20	-.03	.09	.24	.13	.17	.17	.16

3.2. 他者意識、他者の情動理解と恋愛感情の関係

本研究の第2の目的である他者意識、他者の情動理解と狂気、熱愛及び実利的感情の関係を検討するために、他者の情動理解得点によって3群にわけた。そして、その各群ごとに内的、外的及び空想的他者意識と、狂気、熱愛及び実利的感情間の相関係数を算出した。その結果がTable 3 に示されている。

狂気的感情に関しては、空想的他者意識において他者の情動理解が低い水準で狂気的感情と正の相関が大きかった。また、女子についてはどの水準においても外的他者意識と狂気的感情の相関係数が.30以上であった。また、熱愛的感情に関しては、他者の情動理解が中及び低群において内的他者意識と空想的他者意識との正の相関が女子より男子において高かった。なお、実利的感情については、他者の情動理解のどの水準に關しても他者意識との相関係数は大きくなかった。

4. 考察

4.1. 他者意識と他者の情動理解の関係

予想した通り、他者意識の中で、内的他者意識が最も他者の情動理解と関連性の強いことが明らかになった。辻(1993)によれば、内的他者意識とは他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし、理解しようとする意識や関心をさす。他者の内面情報へ関心を向けることが、他者の情動を理解しようとする機会を多く生み、その結果、他者の情動理解能力が高まるといえよう。また、空想的他者意識も内的他者意識よりは相関は低い、一定の関連性を見いだせた。辻(1993)によれば、空想的他者意識は、他者について考えたり、空想をめぐらせたりしながら、その空想的イメージに注意を焦点づけ、それを追いかける傾向を意味している。他者に対する空想的イメージには他者の外見的特徴に関する情報も含まれるが、情動に

関する内的情報も含まれる。それ故、内的情報に関するイメージを追いかけるならば、それは他者の情動理解には促進的に作用することになるのである。

上述した内的及び空想的他者意識とは異なり、外的他者意識とは、他者の化粧や服装、体形、スタイルなどの外面的特徴に対する注意や関心を意味している(辻, 1993)。他者をあくまでも外見的特徴でとらえようとする傾向であるので、内的情報である他者の情動を理解することには貢献しない。予想したように、他者の外的情報に注目する傾向は、他者の情動理解を促すことはないことが明らかにされたのである。また、女子の方が他者の情動理解の得点の高いことが示されたことは、斎藤(1994)が指摘しているように女子が对人的な関心が強いことと関連しているようである。すなわち、对人的関心が強いことによって、そのために情動判断が促進されることになったのであろう。

Goleman(1995)は、情動知能研究の先駆者として有名であるが、彼は、学校が情動知能を育成する重要な場所であると考え、学校において情動知能を伸ばすSEL(Social and Emotional Learning)プログラムを開発する共同研究組織を立ち上げている。そこでは、児童・生徒が自分の情動を理解し、その情動をコントロールし、ストレスを処理し、問題解決や意思決定スキルを向上させることが目標とされている(松村, 2006)。このようなプログラムにおいて重要なことは、具体的な行動目標を設定することである。松村(2006)は、Doty(2001)が情動知能を獲得している者と獲得していない者における具体的な行動の違いの記述を紹介している。そこには、「他者の気持ちがわかる」という行動が情動知能を獲得している者の行動として含まれている。他者の気持ちがわかるという目標を達成するために、どのようなプログラムが実行可能であるかを検討することが大きな課題である。しかし、その前に、他者に対してどのような姿勢をもつべきかを教育することが必要であろう。

本研究の結果は、他者の外見的特徴に焦点をあてるような姿勢では、他者の情動理解にはつながらないことを明確に示した。反対に、他者の内面情報に注目することが最も他者の情動理解を促す可能性を示唆した。したがって、他者の内的情報に注目する姿勢をいかに形成するかが、上記のようなプログラムを開始する以前に必要なのである。また、空想的他者意識が相関の値が低いながらも他者の情動理解に寄与していることは、他者のことをよく考える姿勢が重要であることを示唆している。空想的他者意識の場合、それが空想的イメージであり、内的情報だけでなく、外的情報も混在しているが、それでも他者のことを思い浮かべることの大切さがうかがえる。したがって、「他者の気持ちがかかる」という目標を目指すプログラムを進める前に、他者への関心を育成することが重要であろう。言い換えれば、常識的ではあるが、他者と関わることへの動機づけ、そして、他者のことを考える機会を設けることが他者の情動理解を促す基盤となろう。

4.2. 他者意識、他者の情動理解と恋愛感情の関係

4.2.1. 狂气的感情

興味深いことに、女子についてはどの情動の理解水準においても外的他者意識と狂气的感情の相関係数が.30以上であった。女性の方が男性よりも他者の外的情報に注目することにより、その他者に対する狂气的感情が増すことを示している。対人魅力において外見的特徴の重要性が指摘されているが (Walster, Aronson, Abrahams, & Rottman, 1966; 小野寺, 1989) 外見的特徴によって対人魅力が影響を受ける程度に性差があるかどうかは明らかではない。しかし、ここでの結果はその性差が存在する可能性をうかがわせるものである。女子の方が外見的特徴によって恋愛感情が喚起される可能性は高いのかもしれない。また、空想的他者意識については他者の情動理解が低い水準において狂气的感情と正の相関が大きい。これは、他者の情動理解ができない場合には、他者の空想的イメージによって狂气的感情が喚起される可能性があることを示唆している。空想的イメージばかりを思い描くような場合には、他者の情動理解の水準が低いと相手の心情を無視して、空想的イメージの中で相手を独占したいという感情が喚起されやすいのであろう。言い換えれば、他者を空想的に意識することによって他者に対する妄想が喚起され、それによって相手の自分にとってのネガティブな感情 (好きな人が他の人を好きになるのではないかという不安等) を自ら創造し、狂气的感情がより強く表れる可能性がうかがえる。

4.2.2. 熱愛的感情

熱愛的感情に関しては、他者の情動理解が中及び低群において内的他者意識と空想的他者意識との正の相関が女子より男子において高い。女性に比べ男性の方

が内的に他者を意識した場合、より熱愛的感情に陥りやすいといえることができる。したがって、男性は情動知能 (他者の「情動の認識と理解」能力) が低くなると、女性よりも相手の内面や空想的イメージを意識した場合に、熱愛的感情が喚起されやすいことが示された。このことは、情動知能 (他者の情動理解) の高くない男性は、女性に優しくされた場合に、相手が自分に対して好意をもっているように思い込む危険性があるのかもしれない。

4.2.3. 実利的感情

実利的感情に関しては、他者の情動理解のどの水準に関しても他者意識との関連性はみいだせなかった。外的他者意識は、外見的特徴に注目する傾向なので、実利的感情を喚起する可能性が高いと予想したが、そうではなかった。

4.3. 本研究の問題点と今後の課題

本研究では、内的他者意識が情動知能における他者の情動理解に関連していることが明らかになった。相手の心情などを探ろうとする姿勢が、相手の心情を理解する能力を高めるということである。これは、常識的なことのようにみえるが、これまで他者との関わりにおいて他者のどの特性に注目するのかという視点は扱われてこなかった。本研究では、他者の内的情報に注目させることで、確かに他者の情動理解を促す可能性が示されたのである。さらに、先に考察したように、他者との関わりへの動機づけの重要性も明らかになった。他者を空想的イメージによって意識した場合であっても、他者の情動理解との関連性は認められたのである。Goleman (1995) は上述したSELプログラムによって情動知能の育成を目指す訓練プログラムの重要性を指摘しているが、その訓練に入る前に他者との関わりに関する動機づけ及び他者の特性に対する方向づけの重要性が大切なのである。

今後の課題は、他者の情動理解だけでなく、情動知能のもつ他の側面を高める要因を検討して、情動知能育成のためのSELプログラム以前の教育のあり方を明らかにすることである。

(付記) 本研究のデータ分析に関して、奈良教育大学心理学専攻3回生の井口穰二君、大堀はるかさん、岡村明奈さん、佐藤愛子さん、多田羅由子さん、矢倉利枝子さんの協力を得た。記して感謝の意を表します。なお、第1著者の指導の下、上記3回生がデータ概要を演習授業の一部として平成19年度奈良教育大学輝裳祭 (大学祭) において発表した。

5. 引用文献

Davies, M., Stankov, L., & Roberts, R. D. 1998. Emotional intelligence: In search of an elusive construct. *Journal of Personality and Social*

- Psychology*, 75, 989-1015.
- Doty, G. 2001 Fostering Emotional Intelligence in K-8 Student. Sage Publications. (松村京子監訳 2004 「こころの知性」を育む 東信堂)
- Faria, L., Lima Santos, N., Takšić, V., Raty, H., Molander, B., Holmstrom, S., Jansson, J., Avsec, A., Extremera, N., Felndez-Berrocal, P., & Toyota, H. 2006 Cross-cultural validation of the Emotional Skills and Competence Questionnaire (ESCQ). *Psicologia*, XX(2), 95-127.
- Fineman, S. (Eds) 1993 *Emotions in organizations*. London: Sage.
- Goleman, D. 1995 Emotional intelligence. New York: Bantam Books.(土屋京子訳 1996 EQ:こころの知能指数 講談社)
- Law, K. S., Wong, C. S., & Song, L. J. 2004 The construct and criterion validity of emotional intelligence and its potential utility for management studies. *Journal of Applied Psychology*, 89, 483-496.
- 松村京子編 2006 情動知能を育む教育 - 「人間発達科」の試み - ナカニシヤ出版
- Mayer, J. D., Caruso, D. R., & Salovey, P. 2000 Selecting a measure of emotional intelligence: The case for ability testing. In R. Bar-On & J. D. A. Parker (Eds.), *Handbook of emotional intelligence*, Pp.320-342. San Francisco: Jossey-Bass.
- Mayer, J. D., & Salovey, P. 1997 What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. Pp.3-34. New York: Basic Book.
- Nelson-Jones, R. 1990 Human relationship skills : Training and self-help 2nd Edition. Cassel Publishers Limited, London. (R.ネルソン＝ジョーンズ著 相川 充訳 1993 思いやりの人間関係スキル - 一人のできるトレーニング - 誠信書房)
- 小野寺孝義 1989 美人タイプと美人ステレオタイプに関する研究 東海女子短期大学紀要, 15, 113-122
- 斎藤耕二 1994 他人の感情を理解する 菊池章夫・堀毛一也(編著)(「社会的スキルの心理学」川島書店, pp.41-43.)
- Salovey, P., & Mayer, J. D. 1990 Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, 9, 185-211.
- Schutte, N. S., Malouff, J. M., Hall, L. E., Haggerty, D. J., Cooper, J. T., Golden, C. J., & Dornheim, L. 1998 Development and validation of a measure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, 25, 167-177.
- Takšić, V. 2002 The importance of emotional intelligence (competence) in positive psychology. Paper presented at The first International positive psychology summit, Washington, D. C., October 4-6.
- 辻平治郎 1989 他者の内面への関心、外面への関心、および空間的関心 他者意識概念の明確化とその測定 甲南女子大学人間科学年報 14, 31-48.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 豊田弘司・岸田麻里 2006 教育用簡易版恋愛感情尺度の作成 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 15, 1-5.
- 豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治 2005 日本版ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発 奈良教育大学紀要, 54, 43-47.
- Toyota, H., Morita, T., & Takšić, V. 2007 Development of a Japanese version of the Emotional Skills and Competence Questionnaire *Perceptual and Motor Skills*, 105, 469-476.
- 豊田弘司・桜井裕子 2007 中学生用情動知能尺度の開発 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 16, 13-17.
- Walster, E., Aronson, V., Abrahams, & Rottman, 1966 Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 508-516.
- Wong, C. S., & Law, K. S. 2002 The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude: An exploratory study. *The leadership Quarterly*, 13, 243-274.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, 23, 13-23.